

かずさの博物誌

セッカ(雪加)

～舞い上がりながら鳴く～

文・写真／成田篤彦



©成田篤彦

▲セッカ スズメ目ウグイス科

千葉県指定一般保護生物。全長12cm。体重10g。上総の広いスキやアシ原で見られる。
=2008年6月9日 木更津市 成田篤彦撮影

梅雨の晴れ間に小櫃川河口の三角州を訪れた。セッカの飛ぶ姿を撮るために、土手の左手からセッカの鳴き声が聞こえた。澪(みお)の対岸の中洲のアシ原の上をセッカがヒヒヒヒとあおるよう波打つて舞い上がりついで、降りるときもチャチャチャチャと高低をつけて降りてくれる。しかし、セッカはスズメよりも小さく広いアシ原と青空の中では点にしか見えない。もしも飛びながら鳴いていなければとても気づかないであろう。

羽撓(たわ)め撓め雪加の鳴き移り 深見けん二(復本一郎2006)
『俳句の鳥・虫図鑑』成美堂

土手を下り海岸に向かうにつれてアシ原は広くなつていき、三角州の中央付近から道の右手でも左手でもセッカが鳴いている。一羽が鳴くとそれにつられて周りのセッカがさら

く、どこで鳴いているのかわからぬ。途中、アシの茎の隙間から舞い上がる姿が見えるので、シャツターを押すのだが、何度も押しても焦点が合わずシャツターが切れない。そのうち、セッカがあまり激しく鳴き続けて疲れたせいか、道のそばの枯れ木の先端に止まつた。しかし、レンズを向けるとすぐに飛び去つた。

この日はまともな写真は撮れなかつたが、晴天の中の広いアシ原で聞く透き通るようなセッカの声は蒸し暑さを吹き飛ばしてくれた。

昨年は海岸の埋め立て地の道路を走つていて、アシとスキの原っぱの上空をコアジサシが魚をくわえて盛んに飛び交つていた。そこにセッカが数か所で鳴いていた。このときは垣根越しであつたが、飛ぶ姿を撮ることができた。その中の1枚を拡大してみるとクモをくわえていた。また、黒班のある尾が扇のように広がつていて、平安貴族の服装の模様や色彩を思い起こさせ、みやびやかな美しさがあつた。

クモといえば20年以上も前になるが、小櫃川河口の三角州のアシ原内でセッカの徳利(とつくり)状の古い巣を発見した。中を調べるために解除了したが、クモの糸でアシの葉を固く織り込んでおり、簡単には崩せなかつた。底にはチガヤの穂が敷かれてあつた。(筆者著1993『房総の動物誌』うらべ書房)。ちなみに彼等は見事な巣を造るので裁縫(さいほう)鳥と呼ばれることがあり、いほう鳥と呼ばれることがあります。鳥の巣としては最も美しいといふ人もいる。一昨年は広々とした水田地帯のアシやスキの原っぱで1羽のセッカが鳴きながら飛び降りた。両脚でアシの茎につかり、尾を立てくちばしを上げて大声で鳴いていた。そよ風が吹く見晴らしの良い青空の下でかわいらしいセッカの姿を見るとさわやかな気分になる。

聞くなれば青田の雪加夙く来ませ
川島彷徨子(復本一郎前出)
セッカは冬には土手のスキやア



©成田篤彦

▲越冬するセッカ

ガマの茎につかる。冬期の記録は少ない
=2010年1月25日 木更津市 成田篤彦撮影

山勇(大野雑草子1990『動物の俳句を詠むために』博友社)
しかし、道の両側のアシの丈が高く、どこで鳴いているのかわからぬ。途中、アシの茎の隙間から舞い上がる姿が見えるので、シャツターを押すのだが、何度も押しても焦点が合わずシャツターが切れない。その後、セッカがあまり激しく鳴き続けて疲れたせいか、道のそばの枯れ木の先端に止まつた。しかし、レンズを向けるとすぐに飛び去つた。

この日はまともな写真は撮れなかつたが、晴天の中の広いアシ原で聞く透き通るようなセッカの声は蒸し暑さを吹き飛ばしてくれた。



©成田篤彦

▲飛ぶセッカ

クモをくわえる。翼長約5cm。春~夏に一夫多妻で繁殖
=2009年6月19日 木更津市 成田篤彦撮影